

公開講演

積尊の成道

高崎直道

只今御紹介にあずかりました高崎でございます。本日成道会に際しまして、こういうはえある席におきまして講演をさせていただくというのを私といたしまして、無上の光栄と存ずる次第でございます。

私は、この駒澤大学には長いことご厄介になっておりまして、現在は大学院の方にだけ教えておりますので、あるいは学部 of 学生さんは、ご存知ないかと思うのでありますが、専任の教師を十二年もしておりますので、この学校はあらゆることを全部知っているつもりであったのです。

ところが、実は今私がここに来るにつきまして、耕雲館とはどこであるかということ知らなかったのでありまして、やっぱりこれは、余所者になってしまったな、ということを感じたわけでございます。仏教学部の研究室で聞きまして、早速こちらへ伺いました。

今日、十二月八日が積尊の成道の日であるということとは、

もうここにご列席の方々は、ご承知でありまして、何もこれについて云うことは無いのでありますが、一般的に申しますと、只今、光地先生のお話にもございましたように、この十二月八日という日が、どんな日なのであるかということ、仏教国とは云いながら、日本の人々は殆んど何も知らないのではないか、という思いが私にもございます。

今朝も丁度、新聞を見ていましたら、実は私共にとりまして、あまり良い思い出の日ではございませんので、これもまた現在の学生の諸君は、何もご存知ないことでありますけれども、日本人の平均としまして、十二月の八日という日を聞いた時に、思い出すことと申しますと、今のところは多分、四十年前のあの日のことであろうか、と思うのであります。

今日もまた、新聞でそういうことが、取り上げられましたのは、特にこの四十年という区切りのいい年であったせいなのか。あるいはまた、世の中が少し雲行きがおかしくなっ

てきた、というようなことと関係があるのか知りませんが、
ども、とにかく、十二月八日という日について、日本人の思
い浮かべるイメージといえますのは、私共仏教徒として思い
浮かべるイメージとは、全く違った日になっているわけでご
ざいます。

ところで、私は四十年前には、中学校の三年生でしたが、
十二月の八日に戦争が始まりました、そしてその次に、シン
ガポールの陥落というのがありまして、これが、二月の十五
日であったわけでありまして。中学生でありますし、国策に特
に協力したわけでもありませんけれども、十二月の八日に戦
争が始まって、二月の十五日にシンガポールが陥落すると、
そういうようなことに、何かこの仏教との因縁があるように
感じを持ってですね、中学校の作文の時間に、そんなことを
書いたということとを四十年後の今、フツと思ひ出したような
わけでございます。

それがそのまま、この無事平和になったということであ
りましたなら、大変おめでたいことであつたと思うのであり
ますけれども、残念ながら事柄は、全く反対だつたわけであ
ります。

そういう点で、十二月八日と二月十五日というものについ
て、実は、非常に複雑な思い出が我々に付きまっております。
す。

その問題は、たまたま今日の新聞にそういうことが書いて
あつたことから、ふと思ひ出したこととございまして、仏教
徒にとっては殆んど関係のないことであつたというふうに云
つてもいいかと思ひますし、また、そうであつてほしいと思
うわけでありまして。

この十二月八日の成道会というものが、もうひとつ仏教国
であつても知られていない理由というのには、また様々なこ
とが考えられると思ひのであります。

ご承知のように、日本でも古くからお釈迦様の誕生日は、
「花まつり」という名前で、あるいは、「灌仏会」という名
前で親しまれております。例えば、『徒然草』の中などにも、
灌仏会の頃というような文章がございますし、皆、仏さんの
誕生日というものと春の花の咲き匂うというようなことが結
びつけられて、おめでたい事柄として、おまつりをされてい
たようであります。

他方、涅槃会ということになりますと、これまた例えば
西行法師が、死ぬ時に、如月の望月の頃に花のもとで死にた
いと云つた、とありますように、やはり仏教徒の間で深く印
象づけられております。そういうことで、この誕生会（仏生
会）と涅槃会というものは、日本の仏教徒の行事の中でも、
相当普及していると思ひのであります。今日でも、花まつり
といへば、それは、お釈迦様の誕生日だということは、殆ん

どの日本人は知っているであろうと思います。

ところで、この誕生会と涅槃会と申しますのは、勿論、仏教徒にとって大変重要なことでございます。

もしお釈迦さんが、この二千五百年ほど前にですね。現在ネパールに属します、ルンビニーの地において、お生まれにならなかった、ということを考えますと、勿論、今日の仏教というものは、少なくとも今あるような形では存在しない、と言わざるをえないですね。

ですから、仏誕ということが、非常に大事であるということとは、間違いのないことであります。また、その涅槃、般涅槃ということにつきましても、その後の仏教の色々な教えに対する解釈というふうなことで、これは、大変重要な事柄であると思っております。

つまり、般涅槃によって仏陀は、完全なさとりの世界に入られた。それ以前には、なお身体をこの世に残しておられる。その限りにおいて、不完全であった。そういう解釈が、仏滅直後から次第に行われるようになりまして、そういう意味で、この涅槃会は、単なるこの「死」という問題ではなくして、仏教徒にとっては、非常に重要な聖日となったわけです。

そういうことを離れましても、人間の生と死という、そのしかも生と死の境目、切れ目というところは、非常に大きな

けじめとして重要な事柄でありまして、普通の人々にとりましても、これが人生の一つの区切りとして重視されます。まして、偉大な教師でありました釈尊に關しましては、当然それをよく覚え、これをまた、おまつりするということが、行われたであろうと思っております。

ところが、仏教にとりまして、一体、その生まれたこと、亡くなられたこととならびまして、もう一つ非常に重要な日があります。それは、お釈迦さんが、この世に誕生された日ではなくて、仏教がいわば、この世に誕生した日であります。あるいは、仏陀がこの世に誕生された日であるわけです。それが、この成道会であるわけです。ですから、この成道会、成道ということにぬきにしては、それこそ仏教の存在は、全く考えられない。

例えば、ルンビニーに生まれられた釈尊が、そのまま王子の身として、その地位に安住し、そして、この世の中の何のつらいこともないというふうに思われて、そのまま過されたといえますと、勿論、仏陀の出家、苦行ということはありません。えなかつたわけでありまして、ましてや、その最後の成果としてのおさとりをひらかれるということは、無かつた。おさとりをひらかれることが無ければ、そのさとられた真理を世の中の人々にお説きになるということは、勿論、無かつたわけです。ですから、そういうことを聞いて、その教え

にしたがい、また等しくさとろうとして努力する仏弟子達の集団も、存在しえなかつたし、その仏弟子達の集団がなく、仏の教えがなければ、仏教というものが、今日まで伝わってくる道理が、全然ないわけであります。

そういう意味で、仏陀の成道ということこそが、仏教にとりましては一番大事な日であると、このことを私は、まず初めにお話しを申し上げたいと思つたわけであります。

実は、そのことにつきまして、ここにもう新聞に書いておいたわけでございます、この見出しを読んでいただければ、私がこれからしゃべることが、何もかも全てわかっているだけのことになりますし、講演会は、もうこれで終わりにしていただいても、よろしいのではないか、と思うのであります。

そういうことでして、今日の講演ということ、ご依頼を受けました時に、私はまず、成道ということが、仏教にとつていかに大事であり、それこそが、仏教の原点と云えるものではないか、ということを強調しておきたい、とそういうふうに考えた次第でございます。

要約して、既にもうお話を申し上げてしまったようでございますけれども、先ずここで私共は成道会は十二月八日と言つておりますが、どうしてそれが、十二月八日と決まっているのか、ということをもひとつ問題にする必要があるか、と思

うのであります。

日本の仏教徒の方ですと、釈尊のお誕生が四月八日であり、そして、成道が十二月の八日、お涅槃に入られたのが、二月の十五日であるということで、丁度、暦の順序にしたがひまして、春と秋、冬にかけて日が散らばつております。そして、それぞれに釈尊の徳を讃えて、おまつりをするという習わしになっておりますので、それがもう二千五百年の前から、仏教徒全体の間で、そういうふうに行われているというふうにお考えになるかと思つたのであります。

ところが、現在もう既に、多くの方々が、インドであれ、セイロンであれ、あるいはタイ、その他の南方地域に旅行なされておりますし、新聞なども、そのことを報道しておりますので、大体もう、ご存知であろうかと思つたのですが、南方の仏教徒——セイロンに伝わりまして、その後、ビルマとかタイに広まりました南方上座部といわれる、あるいは今日その人達は自ら、「テーラバーダ」すなわち、長老仏教、長老派というふうにいっておられます。——その仏教徒の間では、お釈迦さんのお誕生日も、成道の日も、涅槃の日も、皆同じ日でございます。その同じ日と申しますが、云つてみれば、インドの暦で、第二ヶ月目の十五日。満月の夜であるわけであります。

ですから、二月の十五日という日付が、このセイロンに伝

わっておりますました仏教徒の伝説によりますと、誕生、成道、涅槃を含めました、全ての聖日ということになっております。これは、おそらく歴史的な事実として、いつお生まれになったかというようなことについての「日付」の記録などは、あまり無かったということなのであります。

仏陀が仏陀として、世の崇敬を集められるようになり、その伝記が次第に細かく形づくられるようになるにしたがいまして、その日付などについての伝承も生じてきたものと思われませんが、その日が、このインドの暦で、二ヶ月目の十五日であります。その日を、「ウエーサカ」の日と云いまして、南方仏教徒は、おまつりしております。それは大体、現在の太陽暦で申しますと、五月の半ば頃にあたります。南方仏教徒にとりましては、その仏陀の聖日といえますのは、この一日であります。一年にその一日だけでありまして、その日を盛大にお祝いしているわけであります。

ところが、中国にその日付が伝わってきました時にですね。これをどういうふうに暦の上で読みかえるか、といった問題があったようであります。

そういうことで、必ずしも、昔から同じ日に誕生なさり、同じ日に成道なさり、そして、同じ日に涅槃に入られたというふうな伝説だけが、決まっていたわけでもなさそうでございます。中国に入った伝承でも、何種類でもあります。そ

ういう中から、最初は、二月八日が成道会というふうに決められたようではありますが、四月八日という日付もある。十五日が八日になるにつきましたは、これは、東海大学の教授をやっておられます、定方晟さんという方がおられまして、仏教の文化的な問題につきました、色々おもしろい、味のある論文を発表しておられる方でございますが、この先生が、「暦のズレ」ということにつきました、問題にされまして、その中国の暦と、このインドの暦の間で、日の取り方が半月ずれているために、この八日というような日が出てきたと。詳しいことは私も、忘れてしまいましたので、どういうふうにずれているのか、わかりませんが、この二月の八日という日も、こうして出て来るのでありまして、それが皆、この成道の日だということになっているのであります。

ところが、この唐の時代に入りましてから後、——宋になつてからでしょうか。その辺で、——この日付をはっきり決めようという試みが、出て来たようでございます。

これは、中国仏教の専門の方にお聞きすれば、もっと詳しいことを、ご存知かと思うのでありますけれども、それによりますと、二月の八日というのは、周の時代の暦によって日付を決めているのであるということです。周の時代と申しますのは、中国の仏教史でいいますと、お釈迦様がお生まれになった年代は、周の時代に丁度あたる、ということになって

いますから、その時代の暦でいうと、二月の八日である。しかし、これを唐の暦に直すと、十二月にあたるんだ、ということをお云うておるようであります。これは、宋の時代の文献であるということでございますから、唐の頃までは、二月の八日とか、四月の八日とか、まだ色々な日付があったようでありまして、これが十二月の八日に決まったのが、宋の時代であるということと、思われるのであります。

それでは、日本の古い文献ではどうかというと、これは実は、先程申しましたように、成道会に関して、あまり資料がないようでございますけれども、延喜式の中にひとつ、日付が出ていのがありまして、それによりますと、西大寺で三月の十五日に成道会をしたということが、あるのだそうであります。これは、私、全部自分で調べたわけでございますので、間違いがあれば、訂正していただかなくてはならないのですけれども、そのように、この延喜式といえますと、平安時代の前期に当りますが、その時代には、三月十五日に成道会をしたという記録があるようです。

そこで、その成道会は、平安時代の日本では、まだあまりはつきりと登まっていなかったし、それがまだ、そのままあまり知られていないということは、お坊さん達もこの成道会をお祝いするということが、段々無くなってしまうのではないか、と思うのであります。

これが、日本ではいつから復活するか、あるいは、本当に成道会が行われるようになったか。ここで、道元禪師が登場してくるわけがあります。

道元禪師は、日本において成道会というものが、ちっとも行われていない、ということをお嘆かれておられます。そして、永平寺では、それをもう二十年來やっているんだということをお、成道会における上堂に際して述べておられる。その言葉が、永平広録の中に残っております。これは、いつの臘八上堂であるか。——臘八は、十二月が臘月でありますので、その八日で、臘八。これも私が云わないでも、ここにおられる皆様方は、ご存知でありますけれども。——臘八上堂という題の法語の中にこういう言葉があります。

日本国先代曾ニ伝仏生会仏涅槃会、然而未ニ曾伝ニ行仏成道会、永平始伝已二十年矣、自今已後、尽ニ未来際ニ（未来の際を尽くして）伝而行矣（伝え行ぜん）

と、こういう上堂の言葉が広録に残っております。

これは、道元禪師が、いかに成道ということを大事になされたかということの、ひとつの証拠であると云って、よろしいかと思うのであります。実はその永平寺が、初めてであるかどうか、これは、事実としては違いかもしれない。と申しますのは、この成道会を十二月八日に盛んに行う、ということとは、宋の時代にその日付が決まったということと相俟つ

て、これは宋の時代に、中国において最も盛んでありました。禅宗が、このことを行事として正式に取り上げて行くようになったという。ですから道元禅師は中国で学ばれて、その行事を日本においても、早速に実行なさったということなのであります。

もし、そうであるとすれば、曹洞宗に限りません。臨済宗でも同じようにして鎌倉時代には、十二月の八日をもって成道の日とし、その日に法要を営むということが、禅宗の各寺において、行われ始めたのではないか、と思うのであります。ただ、これも私は、他の臨済宗につきまして調べたわけでもございませんので、多分そうであるかと考えるわけなのであります。

こういうことで、成道会の意義というものを少なくとも、ご自分で非常に自覚され、その大事なことを宣言なさり、そして成道会を毎年実行なさった、その最初は道元禅師であるということ、私共としては、十分に記憶しておかなくてはならないことであろう、と思うわけでございます。

道元禅師は、永平寺に入られましたから、特に出家ということを非常に大事になされます。そして出家修行することにより初めて仏の世界というものが、そこにひらけてくるということを強調なさっております、この点は永平寺に入られる前、宇治の興聖寺におられた頃とは少し趣きが違うんだ

というようなことも云われておるのでありますけれども、その出家の功德を強調なさいました文章、これは、『正法眼蔵』の中にございますけれども、その中に「出家の日は、成道の日なり」ということをおっしゃっておられるのであります。成道ということがあるためには、まず出家修行しなければならぬんだ、ということでしょう。成道ということは、出家のその日から始まるということでありまして、

そういうことを考えますと、お釈迦様にとりまして、成道ということがあった。その出発点は、まず出家ということから始まったということになります。これも歴史的事実として確かに、その通りであります、もし、このカピラ城を抜け出すということがなかったならば、先程申しましたように、六年の苦行も無かったし、そしてその結果としての、さとりという偉大な成果も無かったと申し上げたわけでありまして、その意味で、「出家の日は成道なり」ということは、まず出家する、仏教に志をたてるというところから始まるという意味と、解釈することもできようか、と思うのであります。

そういうことで暫く、お釈迦様の伝記にそいまして、成道の意義というものを考えてみたい、と思ひます。

仏伝を簡単に申しますと、これも皆さんご承知のことばかり云わなくてはならないので、困るのですけれども、食事の時に毎朝唱える言葉の一番最初に、非常に簡単に明解に、仏

伝が出ておるわけでありませう。

仏生迦毘羅、成道摩揭陀、説法波羅奈、入滅拘絺羅

この四つの句によって仏陀の伝記は、完全に云い尽くされております。この四つの、仏生と成道と説法と入滅という、四つの事蹟。これが、いわば仏教の原点としての四つの大事件であります。この場所が、成道はマカダの地であるとなっておりまして、これにつきましては、誰も異義をはさんでないものであります。また、仏生のカピラ城。これはルンビニーでありますけれども、カピラ城郊外のルンビニーにせよ、あるいは、マガダのブッダガヤの地にせよ、あるいは、説法を初めてなさいました、ベナレスの近辺のサルナートにせよ、そして、入滅なさいましたクシナガラにせよ、これは、現在みんな聖蹟として、云わば、仏教徒にとって、巡礼すべき土地となっております。これも現在は、インド旅行が大変簡単に出来るようになりまして、多くの方がそこにお参りをなさり、そこに仏教の遺蹟として非常にきれいにまつられている、ということ、安堵の胸をなでおろした方もおられる、と思われるのであります。

こういうふうにして、仏教の伝記の中で四つの大事な事件がある。その二番目に成道が来るわけでありませう、そのお生まれになったカピラ城を捨てられて、六年間の修行にお出になった。これにも様々な伝承がございます。

例えば禅宗などで昔から使っているところで云うと、十九歳出家、三十歳成道ということ、十二年の苦行というような説もあるようですが、一般には、二十九歳出家、六年苦行して、三十五歳で成道なされた。そして四十五年間の説法を続けられた後に、入滅なされたというふうになつておられます。

この日付が、ほぼ仏陀の一生、八十歳ということから見まして、間違いなかるうか、と考えるのでありますが、その六年の苦行の間に、釈尊はその当時の色々な修行者達が、やっております、あらゆる修行の方法というものをお取りになった。それを一口で苦行六年というふうに申しているわけでありませう、その苦行というのを最終的には、仏陀は捨てられた、ということになっております。

この苦行を捨てられてどうなされたのか。苦行するということは、自分を自己鍛錬することでありませう、その自己鍛錬していくという、そういう道の反対の極にありますのは、何もしないで、この世の快楽を追っているということでありませう。そういう何もしないで快楽を追っているということと、身を苦しめ断食等の形で不自然な形で身を苦しめて、この精神を鍛錬する。そういう両極端を捨てたところで、ブッダは、中道をお取りになつて、さとりをひらかれたと、こういうふうになつて申されております。この中道と云われているもの

は、実際には、何であるかといいますと、それが、この禅定を修するということであった、と云われておりまして、よって仏教では禅定というものが、修行の根本とされているわけでありまして。

道元禪師のお示しによりますと、「坐禅は安樂の法門なり」ということではありますが、この「安樂の法門」という言葉は、多分、この苦行との対比において、云われていることであらうか、と思うのであります。

こういうふうにして、苦行の結果、この苦行を捨てられまして、そしてこの禅定に入られるその場所が、現在ブツダガヤーと云われている所でございます。ブツダガヤーという名前が付きましたのは、仏陀のおさとりを記念して、ブツダの字が付いたわけですし、ガヤーという町の郊外の地でありまして。傍らを尼連禪河が流れている、という所でありまして。そこで、菩提樹の下でさとりをひらかれた。この菩提樹もまた、そこでおさとりをひらかれたから、菩提樹と申しているわけでありまして、その木の名前は、普通アスバッタの木であるとか、ピッパラの木であるとか、色々なことが云われております。現在でも、その何代目かの孫か曾孫かの木が、その地に茂っておるわけでありまして。

その菩提樹の下に吉祥草を敷いて、その上でお坐りになった。この吉祥草を敷かれた場所といいますが、菩提座

あるいは、金剛宝座といわれている所でございますね。こここそが、それこそさとりの原点なのであります。現在その場所と申します所は、ちゃんと囲いがありまして、ここが、ブツダが成道された場所である、ということが、示してございますけれども、そのすぐ隣りといえますか、その前といえますか、そこにブツダガヤの大塔が建っております。これもまた、仏教の遺蹟としては、大変偉大な記念物でございます。遙か遠くから遠望できるものでございますから、ブツダガヤーといえば、その大塔こそが、さとりの場所であるとお考えになると思うのですけれども、実際は、その大塔の裏に隠れた所に、その菩提座がある、さとりの場所があるわけですね。

これは、ブツダガヤーの大塔にお参りした後に、この外側をぐるっと、回ればおのずから達することのできる所でありまして、皆さんお参りなさっているだろう、と思うのでありますけれども、その仏教の原点というべき、文字通り、地球上の原点としての菩提座、金剛宝座、そこにおいて禅定に入られて、このさとりをひらくまでは、一歩もそこを退くまいと考えられた、とこう云われているわけでありまして。

その日付が、十二月八日というのは、我々はまたそこで、大変色々空想をいれていく余地があつて、大変よろしいかと思うのでありますけれども、日本におきますと十二月八日と

いうのは、寒い冬でございます。冬の真最中、現在は、暦日（こよみ）が変わりましたから、それほど実感はないと思いますけれども、鎌倉時代以後の禅宗の道場において、その成道を記念して、臘八の接心をするというような時には、大変な厳しさであったと思うのであります。

そういう時、時はまさに、これは朝でなければならぬです。その朝、暁の明星の輝いている、その暁の明星をご覧になって、さとりをひらかれた、と。

私共から見ますと、どうしてもこの日付は、十二月八日でなければならぬようになっております。

インドでも十二月と云えば、インドとしては寒い季節でありますし、身の引き締まる時節であります。そして朝ともなれば、かなり冷えてまいりますから、そういう点で十二月八日の厳しさと、早朝の厳しさの中で、この豁然と大悟なさったということが、私共にとりましては、さとりの風光として大変似つかわしい気がするわけでございます。

これは、セイロンの伝説のように、ウエサカの月の十五日では、ちょっと、その感じがあまりないように、私達としては、思うわけであります。

そういうことで、十二月八日の朝まだきに、暁の明星をご覧になって、さとりをひらかれた。

その前に仏伝としましては、色々なことが語られておりま

すね。

第一、このさとりに達する前の、一番最大の問題となったことが、降魔ということであります。魔を退治するということ。魔の軍隊を克服なさったということ、お釈迦さんは、降魔者であり、ジナ（勝利者）である、ということになるのであります。その魔の最大最強のものというのは、煩惱魔といわれているわけであります。

そのいわゆる我々の精神的な悩みというものは、いくらでも尽きないわけでありますから、それを退治なさったと、そういうことで、さとりということ、煩惱を克服したということが、仏教の教理の中では、結びついであります。尤も、煩惱を克服しただけでは、さとったということには、ならないのであります。煩惱を克服することによりまして、心が平安になった、そこにおいて初めて、物の真理、仏陀の言葉で云えば、サツダンマがですね。正法が仏陀の目の前に露わになってきたと、こういうふう云われてきたのであります。

この正法が、その目の前に見えてきた、そのためには、その前段階として煩惱を退治しなければならなかった、と、こういうことであります。

そこで煩惱の退治と、智の獲得と申しますか、般若の智慧を持つこと。この二つのことが、仏教のさとりにとって、重

大なことと考えられるわけでありませう。

ところで、ここに仏教として大事なことがございます。

と云いますのは、仏陀はさとりをひらかれて、その時に、大変さわやかな気持ちになられたんだと思います。私共の下世話な言葉で、こういうことを申し上げることは、いけないかと思ひますけれども、あることがわかった時の清々しき、というものを何十倍、何百倍、あるいは、もう無限倍にした喜びを、仏陀は感じられたと思うのであります。

その境地をまた、これを「自受用三昧」と申し上げているわけでありませう。自分で、いわばエンジョイしている時であります。

もし、この時に——歴史に「もし」はいけないといひますけれども、——もし仏陀が、さとの境地をエンジョイなさったままで、一生を過してしまわれたとしますと、これまた、今日の仏教はないことになります。

その仏陀が、エンジョイしている様を見まして、この仏陀に勧めて、その仏陀がさとしたサツダンマ、正法を、神々も知らないのだから、是非、教えてもらいたい、神々のために是非これを説いてもらいたいと勧めたのが、インドの神様の中で一番偉い梵天であった、ということでありませう。

インドの神々の大将と申しますと、帝釈天がいるのでありますけれども、この場合は、どういうわけでありませうか、梵

天が出てまいります。この梵天が出てきたということは、仏教の歴史が、仏教が大きくなりましたから、後から作られた話であろうか、と思うのでありますけれども、とにかくインドのブラフマンと云いますと、天界の神々の本質をなしている、いわば、絶対者であります。目に見えない絶対者であります。その梵、ブラフマンが姿をとったのが、梵天であります。その梵天すらも、仏のさとりというものを大變すぐれたものであり、立派なものであり、この上ないものである、というふう知って、それを世に広めることを勧めた。ということは、インドの神々によって承認されたということによって、いわば、仏教が、インドにおいて宗教としての市民権を得たと、そういうことも云えるかと思ひますが。

とにかく、世の中の人々がそれを勧めたということは、ちょっと考えられないわけでした、やっぱり神様でなければ、これを勧める資格は、なかったわけでありませう。

ブツダが、ニコニコしていたとしても、一体なんである人は、ニコニコしているのか、と世の中の人々が思ったくらいだったか、と思うのであります。

尤も、その仏陀は、その後、梵天から勧められました、じゃあ、誰に説こうか、と初めて思い出したのが、昔一緒に修行した五人の比丘であった。その五人の比丘は、その後どうやらベナレスにいるらしい、——ベナレスと云いますのは、

いわば、渋谷の駅前のような所でありまして、色々な意見を持っていて人が、色々なことを怒鳴ってやっている所であったかもしれないのであって、そういう広場を想像したらよろしいのでありまして、——あそこへ行けば、きっと彼らはいらるであろう、ということを出かけた、というのでありますが、その途中で仏陀が坐っている所で、黙って仏さんの前に供養を捧げた、という人もいたということでもありますので、仏さんは何もおしゃべりにならなくても、その神々しさに打たれて、おじぎをし、お拝をしていく、という人は、ありえたかもしれません。

そこで、ともかくそういうふうには、梵天に勧められてナベレスにいらっしやって、初めてそこで法をお説きになった。このことを「初転法輪」と申し上げているわけでございますね。「説法波羅奈」でございます。

この「成道摩揭陀」と「説法波羅奈」という、二つのことを結び合わせることによりまして、仏教というものが、初めて成立する。そういう意味で実は、成道は直ちに、この波羅奈における説法というものと結びつく必然性を持っている、と思うのであります。

これによりまして、ダンマが、仏さんがさとられましたサツダンマというものが、仏さんの教えとしてのサツダンマになったわけでありまして。

あるいは、別の云い方をいたしますと、サツダンマである、それを我々が信じてと申しますのは、仏さんがさとられたことを、そのさとられた真理を、言葉に表わされた時に、これが、仏の教えになったということをお我々が信じて、というところにあるわけですね。

仏陀が何をさとしたか、ということをお、これも、おそれた云い方でありまして、よくよく考えてみますと、これは、仏陀以外には、わからないのであります。だからこそ、「自覚」というのであり、自分でさとるんだ、自分でさとることを他人にはわからないですから、そのさとした内容をお話して下さいと申し上げた時に、仏陀が、お話をなさった。それを我々は、それはさとりの内容である、と信じないわけにはいかないわけでありまして。

むしろ、そのさとりをひらかれたダンマとその言葉になったダンマと、それが同じものである、ということをお信じてとところに、仏教が始まる、とこういうふうにお申し上げたらよろしいと思ひますね。

そういう意味で、ダンマこそが、一番基本にある、ということになります。

このダンマということをお強調していきますと、後の仏典にしばしば出てまいりますように、如来が世に出ても、世に出なくても、そのダンマは、永遠に確立している、という言葉

にもなってくるのであります。

このダンマというのは、さとられたダンマであると同時に、それを言葉に表わされた時に、仏の教えとなってきた、ダンマであります。

そこで、この如来が世に出ても、世に出なくても、という言葉が、定型句のようにしばしば現われるのであります。その、如来が世に出る、出世ということ、この如来の出世というところが、仏のさとりを表わす言葉なのであります。

お釈迦さんが、ブッダガヤーの地でさとりが、さとりまいたが、法は変わらないんだ、というのが、その言葉の意味でありますけれども、如来が出世した、という意味は、決してルンビニーにおいてお生まれになったことではなくして、ブッダガヤーの地において、さとりをひらかれたことを指しているわけでありまして、それが如来の出世であります。世に出現するということでありまして。

そういう意味で、如来の出現という意味をよく考えてみますと、このさとりこそ、この成道ということにこそ、本来に如来の出現の意味があるということでありまして。

このことはまた、阿含の經典の中で「一人が世に出現した。大いなる智慧、大いなる光の出現である。」とこういふふう云っておるのであります。「一人とは誰か。如来、応供、等正覚者である」と。そういうふうには、その經典には、

書いてあるのであります。

そのダンマを知ったということ、それが智慧であります。それが世の中で大きな光明となった、ということでありまして。

こういう意味におきまして、我々は、この成道ということ、如来の出現であり、そして仏教の出現である、というふうな考えまして、最も意義ある日と記憶し、そしてその日を記念して、仏陀の徳を讃えるということが、非常に重要なことである、というふうには私は考えるわけでございます。……

本日は、成道と初転法輪ということ、これを抜きにしては、仏教の存在は考えられないほど、仏教徒にとりましては、非常に大事であるということ、この初転法輪の日も含めまして、我々は、成道の日というものを、如来の出現の日として、お祝いしよう、と、こういういわば、成道の意義づけということ、今日の私のお話を終らせていただきたいと思っております。

どうも御清聴有難うございました。

（本稿は、昭和五十六年十二月八日に行なわれた講演テープをもとに、高崎先生が加筆されたものです。）